「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～

（もてなしの文化と賄賂の文化）

テレビで中国の賄賂文化についての報道があった。２０００年以上も前から中国では、科挙の試験の難関を突破して官僚になると、後は子孫3代までが食っていける財をなすことが出来ると言われていた。

多くの日本の企業も中国に進出しているが、この賄賂文化の弊害も痛切に感じている場合もあると思うが、一方親方日の丸で、これに対応している場合もあると思う。あくまで個人の経験であるが、中国、韓国、北朝鮮など東アジア大陸の文化にはこの賄賂がつきものように思っている。

この賄賂文化は国際社会においても、外交面において、色々効果を発揮しているのを経験してきた。日本の国を代表する政治家たちもこの賄賂を受けて、ときには、これがばれて、国内で断罪されたり、上手にのがれたりしている。この賄賂は物、金、男女、何でもありなのである。

もちろん、日本文化の中にも賄賂はある。権益をかさに、見えにくい形で締めて来るのが、日本のやり方である。官僚のもつ権益決定権の行使はそのひとつである。もてなしを受けると嬉しくなる。しかし、もてなしと賄賂の区別が難しい場合もある。表と裏、量と質、見返りのありなし、気持ちと物、時と場所などいろいろなことを考えなければならない。

東日本大震災前に大船渡ユネスコ協会は大船渡湾に入港した観光船飛鳥を迎えるのに、子供たちが岸壁でのコーラスを行って、迎えていた。これは、見事なもてなしであると思う。

3月8日（金）の世迷言に「経営再建中のシャープが、韓国のサムスン電子と資本・業務提携すると知っていささか複雑な思いにかられた」とのべてある。何がどう絡んで、このようになったのかは定かではないが、相手方の深い賄賂文化と巧みな損益計算をしっかりと見据えての決定であることを願っている。

（文化系と理科系）

明治期に欧米の外圧によって開国をしてから、日本の大学教育は大きく文科系と理科系の二つに分かれて教育がおこなわれてきた。特に第二次世界大戦敗戦後は米国占領軍の支配下にあり、米国の教育制度を大きく受け入れてきた。大学に教養部が設置されたのもこのためである。

欧米では、文化系の教育も理科系の教育も人間形成には必須のものとして取り組まれている。欧米にはこの二つをつなげるキリスト教の文化がある。日本では儒教と仏教による修身と日本古来からの道徳がこれに相当するとも考えられる。しかし、明治の開国以来、日本では欧米文化、仏教や儒教の東洋文化、日本古来の文化との折り合いを見つけるための苦闘が続いている。

戦前の大学生の間で流行した歌に「でかんしょう でかんしょう はんとしくらしあとの はんとしはねてくらす よーいよーい でっかんしょ」、デカルト、カント、ショウペンハウエルという西欧の哲学者を歌った流行歌である。

文部省国費留学としてイギリスで勉強した、夏目漱石も西洋の文化価値との相克に悩んだ末、「則天去私」の考えにいたった。現在も、日本では、文明理解を目指した文化系と理科系教育の連携がうまく働いていない。

北里大学では、東日本大震災で大船渡市三陸町にあるキャンパスを被災した。卒業生たちも被災地への復興への活動に協力に参加した。

この経験を踏まえ北里大学は、文化系教育と理科系教育を地域文化教育とつなぎ、これによって別々に行われていた二つの活動を連携させることを目指したボランテイア社会学コースを立ち上げた。この取り組みが被災地東北で実を結ぶことが期待される。

（東海新報記事から）

3月9日（土）の第5面の投稿「核実験に思う 大船渡市日頃市町 黒森 守」は、「核保有国、ましてや実施国が他国の核実験を非難する事ほど滑稽なことはない。放棄して初めて非難声明を発する権利を有する」と述べている。まさに、ごもっともな意見である。しかし、世界は核保有国が増える方向に動いている。

読売新聞の3月12日（火）の第11面に東日本大震災2年 津波犠牲 米女性の記録映画 夢に生きた姿 日本の若者へ」が記載されている。

「宮城県石巻市の小中学校で英語を教え、東日本大震災によって津波の犠牲になった米国人女性テイラー・アンダーソンさん（当時24歳）の人生をたどった記録映画「夢に生きる」が完成し、震災から2年に合わせて日米で上映されている」と述べられている。

国家としての態度と行動、個人としての態度と行動は違うということは、わっていても国家の行動にはしっくりいかないものがある。この矛盾をどのように埋め合わせるのか、このために新聞は何をすべきか、ここに鋭く真剣勝負を仕かけることが新聞の使命であると思う。この（東海新報記事から）の欄を読者と意見を交換する欄にしたらよいのではないかと思っている。